2023年3月11日発行

顧みられない軍事遺構

――旧陸軍通信学校から相模女子大学（帝国女子専門学校）への「転用」過程に着目して――

塚　田　修　一

相模女子大学紀要　　VOL.86（2022年度）

顧みられない軍事遺構

――旧陸軍通信学校から相模女子大学（帝国女子専門学校）への「転用」過程に着目して――

塚　田　修　一

Conversion of a Former Military Reservation into a University Campus : A Case Study of Sagami Women's University in Sagamihara City.

Shuichi TSUKADA

This study aims to explore the process of converting the former military reservation of the Imperial Japanese Army into the campus of Sagami Women's University in Sagamihara city, Kanagawa. This process commenced in 1946 following the Second World War when faculty members and university students converted military buildings into schoolhouses and student dormitories with great difficulty. However, from another point of view, valuable cultural and artistic remains of the Imperial Japanese Army were damaged and forgotten in this process. This is indicated by people's current lack of awareness regarding the campus' history.

Key Words：Military Reservation, the Imperial Japanese Army, Military Remains

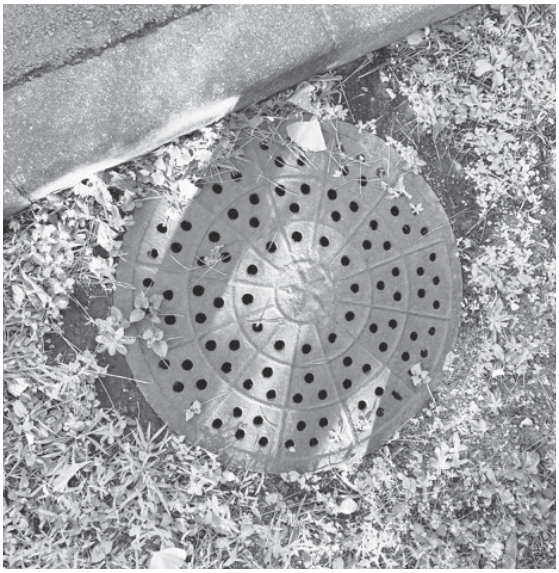
１．問題の所在と先行研究の整理

⑴　消えた煙突・「素通り」されるマンホール

相模女子大学構内に、古びた煙突が在った。陸軍通信学校時代から構内に存在していた煙突（汽缶室煙突）であり、現存している給水塔と並んで、陸軍通信学校時代を物語る「軍事遺構」であった（相模原市教育委員会教育局生涯学習部博物館編2015：254）。しかし、2021年に筆者が学校職員に尋ねたところ、「４、５年前にいつの間にか取り壊された」という。神奈川県横須賀市の猿島砲台跡といった軍事遺構がその文化的価値を認められ、「文化遺産」化していく状況を調査してきた筆者にとって（塚田2020a）、構内の煙突の取り壊しと撤去は、貴重な軍事遺構が粗略に扱われているように思える。

後にまとめるように、相模女子大学の構内には陸軍通信学校時代の遺構が点在している。だが、それらは殆ど顧みられることはない。筆者は2017年に、

構内に残る陸軍通信学校時代のマンホール【写真１】を見学したことがある（塚田・後藤・松下2018）。2020年に相模女子大学に着任し、少し驚いたのは、学生のみならず教職員に、このマンホールの存在が殆ど知られていないことであった。このマンホールという独特の軍事遺構は、「素通り」されているのである。



【写真１　陸軍のシンボルマーク（五芒星）が刻まれたマンホール　2022年筆者撮影】

それにしても、なぜ相模女子大学において構内の軍事遺構が顧みられないのであろうか。本稿は、陸軍通信学校から帝国女子専門学校（相模女子大学の前身）への「転用」過程に着目し、この「無関心さ」の理由を考察するものである。

⑵　先行研究の整理

ここでは関連する先行研究を整理し、本稿を位置付けておこう。

旧軍用地[1]の学校への転用を対象とする本稿はまず、旧軍用地転用研究として位置づけられる。旧軍用地の転用に関しては、主に人文地理学からの研究が蓄積されている。例を挙げると、杉野（2015）は全国の旧軍用地の転用の概要を記述している。また、首都圏の軍事飛行場の転用状況を調査した松山（1997）や、全国の主要都市の旧軍用地の転用を調査した今村（2017）などがある。

これらの研究は、日本各地にある旧軍用地の存在を指摘し、戦後社会における土地利用の実態を明らかにした。しかし、①依拠する資料が主として大蔵省管財局文書といった公文書であること、そしてそれが一因となって、②「どの旧軍用地が、何に転用されたのか」という結果の調査・記述であり、その転用の過程を描くという視点が欠落している。また、③これらの研究で記述されるのはあくまで土地（利用）の状況についてであり、転用をめぐる人々の具体的な「営み」は描かれていない。本稿は転用の「結果」の記述ではなく、学校への転用の「過程」と「営み」に着目し記述するものであり、これら先行研究の欠を埋めるものである。

旧軍用地の学校への転用事例にフォーカスした先行研究は少ないものの、近年、重要な研究が蓄積されつつある。ウーゴ・杉山・佐藤（2022）は、近衛騎兵聯隊の兵舎を転用した学習院女子大学内の校舎について、建築学的な調査を行なっている。また今村（2022）は、東京都区部の旧陸軍施設に使用希望を出していた大学及び専門学校について調査し、旧軍施設の大学及び専門学校への転用実態を調査している。本稿はこれらの先行研究に連なるものである。

本稿の記述に際しては、相模女子大学に所蔵されている学園史や同窓会資料に加え、陸軍通信学校の同期会誌なども参照している。

２.「軍事遺構」と「転用」について

⑴　遺構・モニュメント・軍事遺構

本節では、本稿のテクニカルタームを説明しておこう。

本稿では、戦争に関わる遺跡や遺構を「戦争遺跡」と一先ずは定義しておく。だが、一口に「戦争遺跡」と言っても、そこには分類が必要である。たとえば関ヶ原古戦場は、一般的には戦争遺跡ではなく、「史跡」に分類されるだろう。したがって、「戦争遺跡」とは、特に近代以降の戦争に関わる遺跡や遺構を指す。

次に、この「戦争遺跡」は「遺構」と「モニュメント」に分類することができる。福間良明は、遺構を「戦災やそれに伴う人の死があった建造物等の「現物」を通して、戦争の痕跡を具体的に可視化させるもの」、モニュメントは「戦後新たに創られた記念碑等で、過去の記憶を抽象的でシンボリックに指し示すもの」と定義している（福間2015：10）。それに従えば、広島の原爆ドームは「遺構」であり、沖縄のひめゆりの塔は「モニュメント」である。ただし、この「遺構」と「モニュメント」について付け加えておかなければならないのは、両者の区別は

固定的なものではなく、社会からの「まなざし」によって変動する、流動的なものである、ということである。だから、「遺構」と「モニュメント」が相克／調和したり、「遺構」が「モニュメント」化したりすることもある（福間2015）。

では、たとえば「日吉台地下壕」は、戦争遺跡の中でもどのように分類できるのだろうか。そこは旧日本海軍連合艦隊総司令部が置かれていた施設の跡であるから、「モニュメント」ではなく、「遺構」である。ただし、原爆ドームとは違い、「（大量／非業）死」が伴うわけではない。したがってこれは「軍事遺構」として分類するべきである。この軍事遺構には、地下壕の他に、軍需工場や掩体壕、トーチカや砲台の跡などが分類される。本稿で扱う、相模女子大学構内に残る旧陸軍通信学校時代の遺物や遺構も、この「軍事遺構」として分類することができる。

そしてここで確認しておきたいのは、「戦争遺跡」の中でも、この「軍事遺構」は、「（大量／非業）死」を伴わないが故に、その存在価値や保存の意義が認められにくいということである。実際、「軍事遺構」の多くは、戦後に転用されたり、朽ち果てて廃墟と化したり、また破壊されてきた[2]。言わば「軍事遺構」は「どうでもよいもの」なのである。本稿で検討する、旧陸軍通信学校の遺物や遺構もやはり「軍事遺構」であるが故の「どうでもよさ」に憑かれている。ただし、本稿が明らかにするのは、それらがいかにして「どうでもよいもの」になったのか、ということである。

⑵　「転用」の諸相

本稿では、旧軍用地（陸軍通信学校）の学校（帝国女子専門学校のち相模女子大学）への「転用」過程を考察する。ここで、旧軍用地の学校への「転用」について整理しておこう。旧軍用地の学校転用は、概ね次の３つの要素によって構成されている。１つ目は建物の転用である。これは、兵舎や軍需工場といった建造物を校舎や学生寮へと転用するものである。２つ目は土地の転用である。これは、練兵場などの整備された土地を、学校用地として転用するものである。３つ目は資材の転用である。これは、軍用の資材を転用／流用し、学校空間を作り上げるものである。これらの要素が単独に、あるいは複合的に旧軍用地の学校への転用を構成していた。

以下、本稿では、まず、陸軍通信学校時代の構内の様子を描写し（３章）、敗戦後、それが相模女子大学へと転用される過程とその営みを記述する（４章）。そして、現在、相模女子大学構内に残されている軍事遺構についてまとめた上で、それらが顧みられない理由を考察する（５章）。

３．陸軍通信学校の空間

⑴　陸軍通信学校時代の相模原

1937年の陸軍士官学校の座間への移転を契機として、相模原では、「軍都計画」が構想され、軍関連施設が矢継ぎ早に設置されていく。1938年には、臨時東京第三陸軍病院、相模陸軍造兵廠、陸軍兵器学校が設置されている（相模原市教育委員会教育局生涯学習部博物館編2014）。1925年に杉並区において設立された陸軍通信学校が、1939年に相模原へ移転してきたのは、そのような潮流の中であった。

陸軍通信学校幹部候補生第一期生の同期会である一二三会による『相模原遙かなる空よ』（一二三会1992）は、当時の陸軍通信学校の様子を伝える貴重な資料である。同書に掲載されている、陸軍通信学校で教官を務めた人物の回想は、当時の陸軍通信学校付近を次のように描写している。

> 相模原は風が強いと砂塵濛々、顔の色まで変る。我々は大山（別名、阿夫利山、あふりやま）おろしといった。大陸を予想戦場として、軍服はすべてカーキ色（黄土色）であった。現在は濃緑色であるのは、大陸でなくて草や木のある所だろうか。冬の日は軍靴もふみこむような霜柱。洗濯物も凍りついて容易に乾かない。通信学校前駅にはバラックの野菜などを売る店が四・五軒あるほか、学校までは家はない。ただ学校の手前の角地は衛戍病院（相模地域を所管）であった（一二三会1992：152）。

> 北の方の大沼と鵜の森に村落があった。ひっそりと静まり返る村落は我々に関係がないように思えた。時折人のけはいがするのは、学校へ往復する子供達の姿のみである。けれども夜間演習で出た時など、この農家に立ち寄って、生みだちの卵を買う。暗やみで足元も危なげ。元気な頃で、卵はおいしかった（一二三会1992：152-153）。

⑵　陸軍通信学校の構内

次に、当時の陸軍通信学校の構内の様子を確認していこう。陸軍通信学校の構内については、残され

た図面【図１】や、『陸軍通信学校第八期生の記録』（八期生の記録編集委員会1984）に記載されている、陸軍通信学校卒業生が作成したと思われる構内図【図２】から、建物の配置等は正確に把握することができる。また、一二三会（1992）の記述に依って、構内の様子を具体的に確認することにしよう。

現在の相模女子大学の正門は当時のそのまゝを残す。周囲の生垣も面影を残す。守衛室の上屋の小さな古びた屋外灯まで、当時のまゝのようである（一二三会1992：154）。

正門をはいると左手（西）の松林の中に二階建の通信学校本部がある。後に火災で焼失したとか。本部前の松林で隅田［引用者註：当文章の執筆者と通信学校の同期であった人物］と将来のことについて話し合ったことがある。私も生徒隊本部附として、ここの一階、入口から左、北側の部屋にいた。この時は隊附将校として主に教育計画・生徒召集・教育資料・教材の作成などが業務であった（一二三会1992：155）。

後に確認するように、この通信学校本部は1947年に火災により消失している。正門を入って左手には、現在、茜館（元の大学本部）がある【写真２】。陸軍通信学校時代は将校集会所であった。

正門からはいって右手（東）は、現在大学本部であるが、将校集会所であり、昼食時、全体会議などに集まった。入口近く酒保（売店）・撞球室などもあった。集会所から通りに面した庭も洋風で、この池と植込みは建物と共に当時のそのまゝである。集会所につづいて調理場、浴場などがあった。週番勤務（一週間の当直）の時に利用した（一二三会1992：156-157）。

【写真２　茜館（元将校集会所）　2022年筆者撮影】

さらに陸軍通信学校の構内は次のように描写されている。

現在の体育館から本部寄りに剣道場があり、道場の裏には鉄棒がある。このあたり無線のアンテナ用鉄塔があって通信隊のシンボルであった。今この基礎が残っている。校庭からはるかに見える大山の姿、心のふるさととして数々の思いをよせた（一二三会1992：157）。

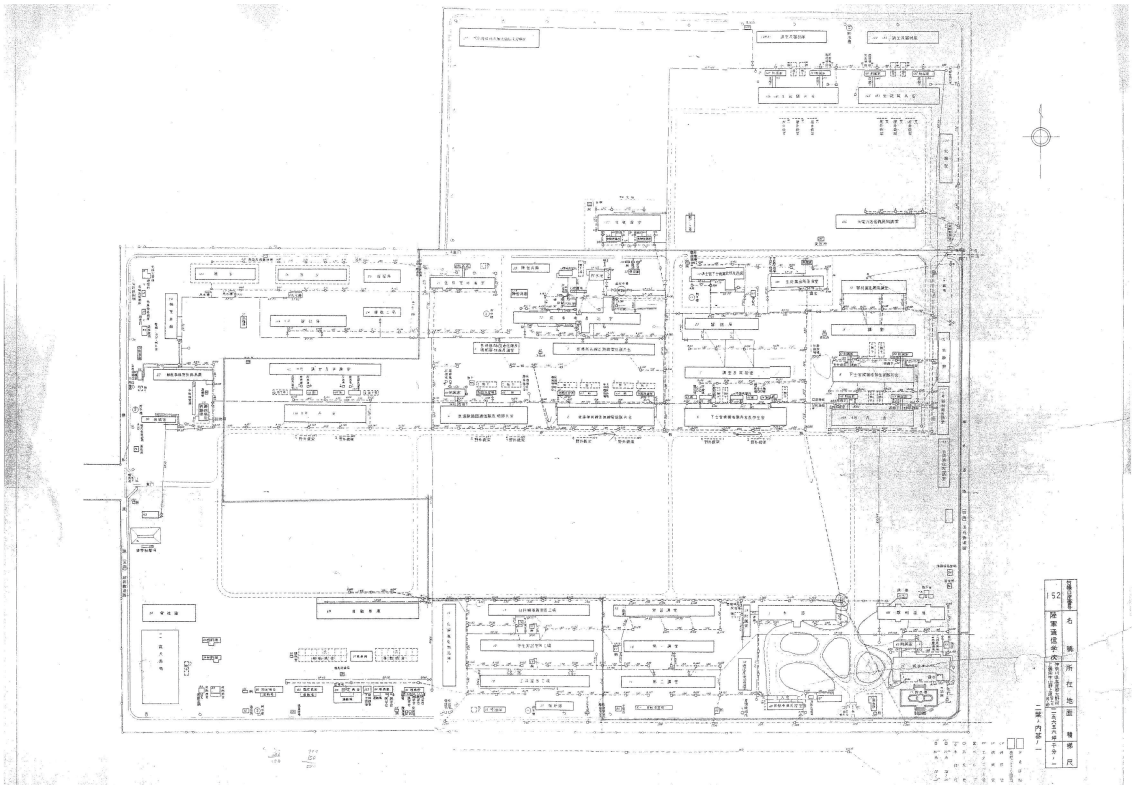
なお、この「鉄塔の基礎」は、現在の相模女子大学構内では判然とせず、確定できなかった。

学園の奥の方（北）には生徒隊・通信講堂が現存している。大学の幼稚部であろうか。ここではモールス符号をおぼえることからはじまって、相互に通信し合う対向通信まで、訓練を行ったところである。周囲には草が生えて建物も老朽化した。我々も老いたが、正に夢のあと。国破れて山河あり、城春にして草木深し。たとえ建物は朽ち果てるとも、戦没の英霊よ、学園を守り給え（一二三会1992：158）。

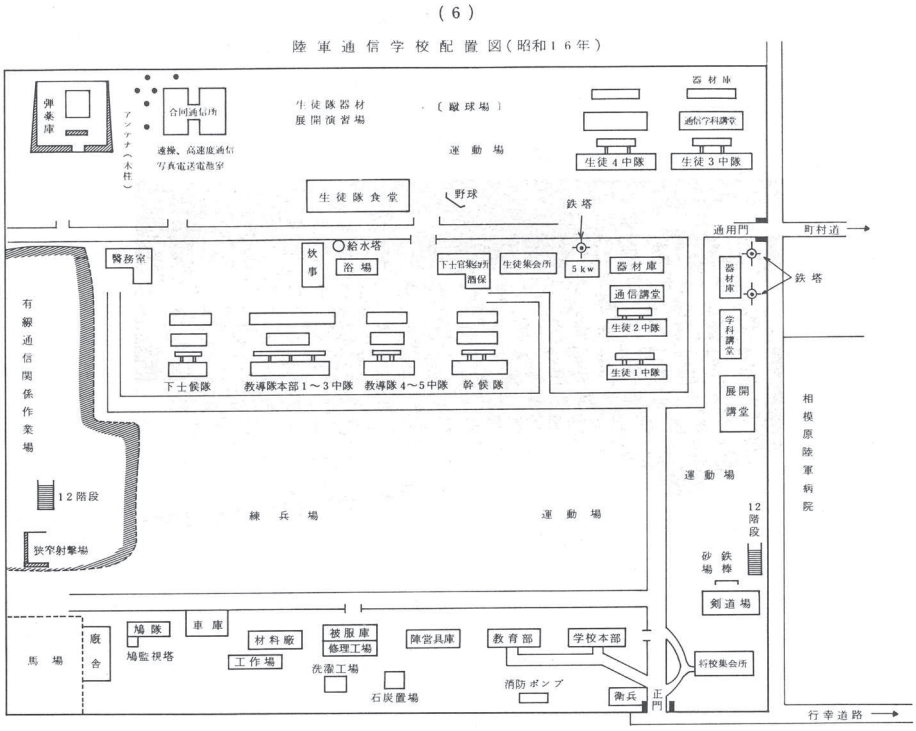
この「生徒隊・通信講堂」も、現在の相模女子大学構内では確認できなかった。

校舎の配列は当時の学校本部を背にして眺めると、右（東）から生徒隊・幹部候補生隊・下士官候補者隊・教導隊となり。各隊共に前（南）から、起居する校舎（兵舎）・通信講堂・器材庫となるのがおよその配列であった。尚、後方に食堂・酒保・浴場・医務室等の付属設備があった。生徒隊のほか大学校舎四号館・同一号館の奥に一部の校舎が現存する（一二三会1992：159）

ここで記述されている「現存する一部の校舎」についても、現在の構内では判然としない。



【図１　陸軍通信学校図面（相模女子大学管財課提供)】



【図２　陸軍通信学校配置図(八期生の記録編集委員会1984:6)】

1945年８月15日の敗戦により、この空間は陸軍通信学校としての役目を終える。そして1946年にこの場所に移転したのが、戦災により校舎を失っていた帝国女子専門学校（相模女子大学の前身）である。

４.「転用」の営み

⑴　相模原移転の経緯

相模女子大学の始まりは、1900年10月18日、現在の東京都文京区湯島で開校した日本女学校である。その後、1909年に文京区大塚に移転し、帝国女子専門学校と名を変える。しかし、1945年４月13日夜の米軍の空襲によって校舎を失う。近隣の拓殖大学の構内、次いで世田谷区玉川用賀町の正和女子商業学校の仮校舎に移転し、終戦を迎える（相模女子大学八十年史編集委員会1980：229-231）。

終戦後、帝国女子専門学校は再建のための移転先を探すことになる。その候補地として検討されたのが、旧軍用地であった。今村（2017）によれば、終戦直後、罹災学校の復旧に必要な建築用資材は極度に不足していたため、罹災学校は焼失した校舎の代替施設を、他の既存建物に求めざるを得ず、終戦によって遊休化していた旧軍建物に目が向けられた。罹災学校は、土地としての旧軍用地ではなく、少し手を加えるだけで校舎や寄宿舎に転用できる兵舎や倉庫などの旧軍建物を必要としたのである（今村2017：71）。

当時の校長を先頭にして、以下の旧軍用地を視察して回った（相模女子大学1960：103-104；相模女子大学八十年史編集委員会1980：232-233）。

① 世田谷：旧近衛砲兵連隊兵舎
② 世田谷：陸軍機甲整備学校
③ 国立：陸軍結核病院
④ 立川：陸軍航空隊兵舎
⑤ 駒場：近衛輜重兵連隊兵舎
⑥ 鴻の台：騎兵連隊兵舎
⑦ 鴻の台：砲兵連隊兵舎
⑧ 松戸：陸軍砲工学校
⑨ 前橋：理研工場
⑩ 横須賀：陸軍某施設
⑪ 相模原：陸軍通信学校

ちなみに①は昭和女子大学、②は東京農業大学が使用し、現在に至っている。いずれの施設も一長一短があり、そのまま直ちに学校として満足に使用できるものはなかったものの、相模原の陸軍通信学校跡には、机、椅子、黒板などがあり、教室や図書室、講堂、寮にも使えそうな建物もあり、また水も自家発電で豊富に汲み上げられることなど、それほど手を入れなくても授業が行える環境であるとして、第一候補に決定し、獲得することができた（相模女子大学学園史編纂委員会編2013：243）。

1946年３月30日より４月２日までの４日間を費やし、帝国女子専門学校は、東京神田の共立女子学園の仮校舎から相模原の旧陸軍通信学校跡地への移転を完了する（相模女子大学八十年史編集委員会1980：232-234）。

⑵　旧陸軍通信学校の転用

当時の旧陸軍通信学校近辺の様子は、次のように描写されている。

> 小田急線相模大野駅から徒歩約一〇分の距離で、便利であったが、学校までの道路はまだ舗装されておらず、凸凹のはげしい砂利道であり、街灯もほとんどついていない有様であった。また、その途中にある米軍病院（旧日本陸軍病院）以外、建物らしいものもなく、畑が続いていた。従って、駅前に数軒の商店があるだけで、日常生活はかなり不便であった（相模女子大学八十年史編集委員会1980：234）。

前節で確認したように、それほど手を入れなくても授業が行える環境であるとされていたものの、当時の陸軍通信学校跡地の校舎の一部にはアメリカ進駐軍が入居しており、また、建物の一部には近在の戦災者や海外からの引揚者が思い思いに住んでおり、構内の各建物もかなり荒廃していたという（相模女子大学1960：105）。たとえば移転当初の将校集会所は次のような有様であった。

> 旧陸軍通信学校は、まさに荒れ放題で、入口近くにある将校集会所（現在茜館の旧大学第一本部棟）の内に入れば、壊れた机や椅子、鉄かぶとが散乱し、少し前まではこれが整然たる軍隊の学校だったとは考えられない情景に、誰もが呆然とするばかりであった。構内の奥には高い電波塔がそびえ、通信学校の名残を残していた（相模女子大学学園史編纂委員会編2013：248）。

移転してきた帝国女子専門学校の教職員と生徒達

は、この荒れ果てた陸軍通信学校跡地を校舎として整えていかなければならなかった。

三年生と二年生の有志七、八名は、それから一週間、雑巾や箒を持参で、主に将校集会所の清掃に精を出した。集会所にあった机や椅子が近くの農家に払い下げられているのを知って、一軒一軒農家を訪ね、頭を下げてそれをもらい受け、リヤカーや大八車を借りて運んだ。厭味を言われることも度々で、それでも譲り受けることができればまだ良く、もらえずに帰ることもあった（相模女子大学学園史編纂委員会編2013：249）。

また、構内に残されたいくつかの兵舎を学生寮へと転用することにしたが、その作業も骨が折れるものであった。当時入学・入寮した学生は、次のように回想している。

寮は兵隊の兵舎跡で、割り当てられた部屋には何もありませんでした。「まわりの農家の人達がベッドを持っていってしまいましたので皆さん引き取りに行って下さい。」と案内されたのは樹木に囲まれた農家の家々、先生の指導で二人一組になって夫々の家から重い木のベッドを運びました。私は母と二人で休み休みやっとの思いで寮の二階の私の部屋に運び込み、持って来た荷物の整理をするといった大変な入寮でした（相模女子大学同窓会翠葉会2007：101）。

その寮室内の生活は以下のようであった。

寮室も兵舎（陸軍通信学校）のまま、粗末極まる荒木のベッドが四床並んでいるばかりで、何の装飾もないところだった。私たちは板壁側に作りつけられた棚に本や行李、トランクの類いを並べ、中央に机を向かい合わせて勉強した。電灯が一つだったからである（相模女子大学同窓会翠葉会2007：115）。

そして兵舎は少しの改造を施し、教室（校舎）へと転用された。

教室は、木造の古い兵舎を少し改造したくらい。ほとんどそのままの状態である。特に冬の寒さはこたえた。もちろん暖房があるはずもない。着ているオーバーを腰に巻きつけて、寒さをしのぎながら授業を受けた。（相模女子大学同窓会翠葉会2007：94）

このように、旧陸軍通信学校の帝国女子専門学校（のち相模女子大学）への「転用」は、構内に残された荒れ果てた建造物を自分たちの手で修復し、また資材をかき集めて利用し、何とか学び舎（と呼びうるもの）や住居（寮）を確保する営みであった。

さらに、ここでの「転用」の営みには、学生にとっての学び舎や住居（寮）を作り上げることに留まらず、教職員の住居を確保し、また耕作地を作り出すことも含まれていた。後に学生寮美蔭寮となった広大な二階建ての旧兵舎には、戦災で住居を失った教職員が、家族であるいは単身で移り住んでおり、さらに戦後の食糧難の折でもあったため、生徒や教職員は自給自足を目指して校地を耕し、食糧増産に励んでいたという（相模女子大学八十年史編集委員会1980：235）。

すなわち、旧陸軍通信学校から帝国女子専門学校への「転用」とは、２章で整理した、旧軍用地に残された、①建物・②土地・③資材を全てなりふり構わず利用し、校舎、教室、寮、そして畑へと何とか作りかえる営みであった。

1947年に公布された学校教育法の実施に伴い、帝国女子専門学校は、1949年に相模女子大学となる。

５.「転用」の帰結

⑴　「転用」の過程で失われたもの

前章で記述した「転用」の結果、現在の相模女子大学のキャンパスの骨格が形成されていく。しかしながら、旧軍用地から学校へ転用する過程で失われた建造物もある。３章の陸軍通信学校の教官を務めた人物の回想にもあるように、正門の西側の松林の中に、陸軍通信学校の本部（二階建二百坪）があった。終戦後に、帝専第一寮として転用されていたが、1947年７月に失火焼失している（相模女子大学1960：107）。

相模原市教育委員会教育局生涯学習部博物館編(2015)、および筆者の実地調査よって、相模女子大学構内に現在も確認できる遺構は以下の通りである[3]。

①　正門
②　石垣
③　将校集会所（現「茜館」）

④　フランス庭園
⑤　マンホール
⑥　防空壕入り口
⑦　給水塔
⑧　ポンプ室および貯水池
⑨　制水器蓋

このように、現在も残っている遺構のほとんどが、石材またはコンクリート製の堅牢なものか、あるいは頑丈な鉄製（マンホール、制水器蓋）である。陸軍通信学校の兵舎や校舎といった建造物はほぼ残っていない[4]。その多くが劣化しやすい木造建築であったことも要因であろうが、前章の記述を踏まえるならば、それらが校舎や寮へ「転用」される過程で、なりふり構わず様々に改造・修繕されたことも、現存していない要因といえよう。

⑵　「転用」と「保存」の相容れなさ

旧陸軍通信学校から帝国女子専門学校および相模女子大学への「転用」の特徴を指摘しておこう。

第一に、陸軍時代からの引き継ぎが欠落していることである。移転先の選定に際して、本部省当局から「早い者勝ち」であることが示唆されており、丁寧な説明や引き継ぎなどは行われた様子はない（相模女子大学1960：102-103；相模女子大学八十年史編集委員会1980：233）。そのため、おそらくは陸軍省が所蔵していた各種図面や設計図などは学園に引き継がれていないのである[5]。

第二に、「転用」の営みにおいて、建造物等の価値を認め、「保存」するという意識が欠落していたことである。既に見たように、この「転用」は、陸軍通信学校跡地に残された荒れ果てた建造物を自分たちの手で修復し、また資材をかき集めて再利用し、何とか学び舎（と呼びうるもの）を確保するものであった。そこには、当然ながら、それらの建造物の文化的価値を認め、保存しようという意識は皆無である。この「転用」は、事後的に見れば、将来の「軍事遺構」としての価値を毀損する営みであった。すなわち、「転用」の営みと「保存」は相容れないのである。

こうした特徴を有する「転用」の営みの当然の帰結こそが、本稿の冒頭で指摘した、相模女子大学における軍事遺構への「無関心」であろう。そこにはそもそも「保存」の意識が極めて希薄であり、構内に辛うじて残る軍事遺構は、「いつの間にか取り壊される」ことが既に運命づけられているのである。

註

⑴　本稿における軍用地とは、「戦前・戦時の日本の陸海軍が独占的な管轄権を持って使用していた国有地」（荒川2007：1）を指す。具体的には、飛行場、官営の軍需工場、軍需物資保管倉庫などの軍事施設が設置されていた土地である。

⑵　そうした「破壊」と「転用」の例を挙げておこう。2013年には日吉台地下壕の一部が宅地造成のため破壊されている。また、国内で軍事遺構が多く存在していたのが、旧軍港都市（横須賀、舞鶴、呉、佐世保）であるが、戦後、それら軍港都市に所在した旧軍用地や軍事施設の民需への再利用を促進する「旧軍港市転換法」（軍転法）が制定・施行される（1950年）ことによって、それらの「転用」は制度的に促進されていく。横須賀市追浜地区は、この軍転法を適用することで旧軍用地と軍用施設を転用し、工業地帯として発展していく（塚田2020b）。

⑶　相模女子大学に隣接する谷口台小学校の構内には、鳩隊が伝書鳩を飼育していた鳩舎の遺構が倉庫として存在している（相模原市教育委員会教育局生涯学習部博物館編2015：452）。一二三会（1992）には、次のような記述がある。「本部の西には材料廠があり、その西には鳩舎があって伝書鳩がいた。」（一二三会1992：155）

⑷　茜館（旧将校集会所）の側には撃剣道場があり、相模女子大学の第二本部棟として使用されてきたが、2007年に取り壊されている（相模原市教育委員会教育局生涯学習部博物館編2015：451-452）。

⑸　実際、茜館（旧将校集会所）は帝国女子専門学校移転時より、言わば場当たり的に修繕が繰り返されてきた。そのため、陸軍通信学校時代からの「オリジナル」は保存されず、現在では、どの部分が陸軍通信学校時代からのものなのか判然としない。学校職員から聞くところによると、茜館（旧将校集会所）の設計図が存在しないのだという。

参考文献

荒川章二、2007、『軍用地と都市・民衆』山川出版社.
福間良明、2015、『「戦跡」の戦後史――せめぎあう遺構とモニュメント』岩波書店.
後藤美緒・松下優一・塚田修一、2023、「旧軍用地に住むということ」『中央大学文学部紀要 社会学・社会情報学』第33号.
八期生の記録編集委員会、1984、『陸軍通信学校第八期生の記録』.
一二三会、1992、『相模原遥かなる空よ』.
今村洋一、2017、『旧軍用地と戦後復興』中央公論美術出版.
――――、2022、「東京都区部所在の大学及び専門学校等による終戦直後の旧軍用施設の使用希望とその実現について」『都市計画論文集』Vol.57 No.1.
松山薫、1997、「関東地方における旧軍用飛行場跡の土地利用変化」『地学雑誌』106巻３号.
相模原市教育委員会教育局生涯学習部博物館編、2014、『相模原市史 現代テーマ編』.
――――、2015、『相模原市史 文化遺産編』.
相模女子大学、1960、『相模女子大学六十年史』.
相模女子大学学園史編纂委員会編、2013、『校舎は焼けても、学校は焼けない―相模女子大学の110年―』.
相模女子大学同窓会翠葉会、2007、『軌跡　同窓生が綴る母校の歴史』.
相模女子大学八十年史編集委員会、1980、『相模女子大学八十年史』.
杉野圀明、2015、『旧軍用地転用史論〈上巻〉』文理閣.
塚田修一、2020a、「戦争遺跡と軍事遺構」木村至聖・森久聡編『社会学で読み解く文化遺産』新曜社.
――――、2020b、「旧軍用地から工業地域への変容過程―横須賀市追浜地区を事例として―」『三田社会学』25号.
塚田修一・後藤美緒・松下優一、2018、「軍都から商業集積地へ」塚田修一・西田善行編著『国道16号線スタディーズ』青弓社.
ウーゴ ミズコ・杉山経子・佐藤桂、2022、「学習院戸山キャンパスに遺る4B館とC館に関する建築史的研究」『学習院女子大学紀要』第24号.